

ロシア海軍軍人による日本地図作成（一七三〇年代—一八二〇年代） —海軍大将イワン・クルーゼンシュテルン生誕二五〇周年記念に寄せて—

ワレンチン・スミルノフ

ロシア国立海軍文書館には、一六世紀から一九世紀にかけての特に貴重な地図とアトラスが数十点保管されている。これらの地図・アトラスはかつて海軍中央地図作成局のアーカイヴに保管されていたが、当時の局員であるV・V・コルゲシキンが特別便覧【解説目録。一部地図付き】を作成し、一九五八年に出版された¹⁾。これらの膨大な地図コレクション（数千点）は、一九七〇年代の始めにロシア国立海軍文書館に移管された。地図・アトラスの保管番号が変更されたことに伴い、V・V・コルゲシキンが作成したリファレンス・ブックは二〇一三年に再出版された²⁾。本稿作成に当たっては、このリファレンス・ブックと同時に、当文書館のΦ1331の資料（海軍中央地図作成局所蔵のアトラス、地図・大縮尺地図コレクション）も利用した³⁾。

日本列島は、ヨーロッパ諸国の住人にとって一七世紀に至るまで事実上未知の地《Terra incognita》であった。周知のとおり、最初に日本人と通商関係を取り結び【ママ】、あまり知られていないこの国に関する情報を収集する可能性を得たのはオランダ人である。

偉大な地理上の諸発見は、大規模な通商関係の発展をもたらしたのみならず、航海術・地図作成の発達を促した。ヨーロッパの多くの優れた地図作成者たちが、海図も含め様々なアトラスを編纂した。これらのア

トラスはいずれも歴史と文化の優れた金字塔と言ってよい。

それらのうちのひとつでオランダの地図学者ピーテル・グオース（Pieter Goos, 1616-1675）により一六七〇年に刊行された『地球上のすべての外洋を納めた海洋アトラス』の中の南東アジア地図やオーストラリア地図上、左上隅の隅に日本図を見ることができ⁴⁾。また、同アトラスの東アジア図の左下四分の一にホンシユウ島とエゾ島（マツマイ）の一部が描かれている。そしてそのアトラスの最終葉に、カリフォルニアから日本までの太平洋海域を描いた一六六六年の地図があり、ホンシユウ島やエゾ島（マツマイ）の一部を見ることができ⁵⁾。

イギリスの『新海洋アトラス（Atlas Maritimus Novus or The New Sea-Atlas, London, 1721）』は全世界の水路学・航路航海事情を収めたものであるが、東インド図部分の一つに小さく日本が添えられている⁶⁾。

優れた版画家で地図作成者のヨハン・ホマン（Johann Baptist Homann, 1664-1724）が設立したドイツの地図作成所で一七七四年に編纂されたアジア地図では、多くの地理対象はまだ現在の姿とはかけ離れたかたちで描かれている。日本もその例外ではない⁷⁾。

フランスの水路アトラス（一七五六年）は一三一葉の地図を収めたものである。その中の太平洋地図（一七四二年）の左上隅に日本が置かれ

ている。⁽⁸⁾

地図集成『東インド航海者大全、または東方水先案内人 (The complete Ost-India Pilot or Oriental navigator, London, 1805)』にある一八〇〇年作成のインド洋・太平洋地図の右上部に同じく日本列島が見られる。⁽⁹⁾

ロシア人が日本海域に出現したのは、ヴィトゥス・ベリング准将指揮下の第二次カムチャツカ (または大北方) 遠征時 (一七三三―一七四三)⁽¹⁰⁾ であった。

第一次カムチャツカ遠征 (一七二五―一七三〇) から帰着した際、ベリングは女帝アンナ・イオアノヴナに報告書を提出し、その中で彼川の間ロシア北海岸をそれぞれ調査することを提言した。海軍庁は新たな、すなわち、第二次カムチャツカ遠征 (一七三三―一七四三) の準備に入り、日本沿岸視察とクリール諸島・アムール川の測量のために派遣される独立探検隊の長には海軍士官 M・P・シユパンベルグ⁽¹¹⁾ が任命された。

一七三八年夏、シユパンベルグ大佐 [капитан полковничьего ранга] 指揮下のアルハンゲル・ミハイロ号と V・ウォールトン [ロシア語表記はヴァリトン。ここでは英語表記を採用する] 大尉指揮下のナジェジダ号の二隻からなる新造艦遠征隊はクリール諸島の西海岸沿いを航行した。シユパンベルグは、当時まだ知られていなかった島が三島あることを確認し、それらに名前を与え地図に書き込んだ。中でも特筆すべきは、イトウルツプ島 (シユパンベルグの命名では「シトロン島」)、シコタン島 (同じくフィゲールヌイ島 [「ハンサム島」、「凛々しい島」の意])、およびゼリョーヌイ島 [「緑島」の意] である。

翌年、シユパンベルグは再度遠征を行い、今度はクリール諸島の東側

に沿った進路を取った。北緯三九度に到達したところで、シユパンベルグは日本の沿岸を見つけ、そのまま南下し、五月二二日投錨した。彼はそこで土地の住民と接触し、物々交換を行った。一行は更に北東方向に向かった。その行程で、シユパンベルグは多くの島を確認したが、部下たちが病気だったために接岸せず、七月一日にボリシェレツク (カムチャツカ) に帰港した。この航海の総決算として地図が作成された。その説明文には次のように記されている。「オホーツク」港から「ボリシェレツク」カムチャツカ要塞に至るまで新しい tabula [「マ」、ボリシヤ川からクリール諸島と日本列島の間を経て日本本土に至るまで tabula あるいは *tabula* が航行した。⁽¹³⁾ 海軍大佐記。一七三八年・一七三九年⁽¹⁴⁾。地図は海軍士官学校助教イリヤ・ジヤコフにより作成され、シユパンベルグ大佐により認証された。

地図には、とりわけ、クリール諸島、日本列島の中の北の島、日本沿岸での両艦艇の挿画がいくつかと、ボリシェリエツクと日本との間の艦艇の移動ルートが (赤の点線で) 描かれている。説明書さも添えられ、その中に次のような一文がある。

「六月二二日、わが艦に向かつて日本人の舟七九艘、人数にして千人近く「の人たち」がやって来た。日本人たちは、品物を持ってきて、水兵を含めうちの士官たちの衣服と物々交換をした」などなど。

地図はメルカトール図法で作成され、二八マイル一インチの縮尺 (1:2048240) で製図紙に描かれている。地図には、経度・緯度グリッド (三度毎)、コンパスグリッド、コンパスマスが入っている。地図の大きさは一一〇・五×五一・三 cm。

当館には一枚ものの「北クリール諸島地図。一七三九年」が所蔵されている。⁽¹⁵⁾ これは海軍士官学校学生イワン・ラコフと同校助教のピョートル・ラストルグエフがオリジナルの地図を複写し、ウォールトン大尉が

署名したものである。同地図には、とりわけ、クリール諸島、ホッカイド島の東部沿岸の一部、ウォールトン大尉が一七三八年と一七三九年にオホーツクを出港後クリール列島沿いに航海した航路が記載されている。

縮尺は一インチが四四・五マイル (1:352060)、経度・緯度グリット、コンパスグリット【コンパスローズ】入り、多色刷り、薄紙に描かれ、青い厚紙に糊付けされている。地図の大きさは八九×四三cm。ユニークな地図として「全ロシア帝国地図。北極海および東太平洋に面する北部・東部シベリアの沿岸、航海により新たに発見されたアメリカ西海岸および日本列島を含む。七二五―七四二」「一七二五年に開始され一七四二年に終了した」測量により作成」がある。

同地図には、ヴェイトウス・ベーリング率いる第二次カムチャツカ遠征 (一七三三―一七四三) に参加した海軍士官たちの真正の署名が記されている。

「海軍中佐ステパン・マルイギン、ドミトリー・ラプチェフ、大尉ドミトリー・オヴツィン、大尉サフロン・ヒトロヴォ、海軍少佐イワン・エラギン、海軍中佐アレクセイ・チリコフ、大尉ハリトン・ラプチェフ」。さらに、この地図は「海軍アカデミーの下、地理学教官ワシリー・クラシリニコフと地理学助教ビョートル・ラストルグエフにより作成。一七四六年五月一〇日」と記されている⁽¹⁶⁾。

表題中には地図作成に際し使用された資料が詳述されている。挿図もある。カヌーに乗ったアメリカ人、海牛、オットセイ、セイウチである。縮尺は一インチ二〇マイル (1:8769600)、経度・緯度グリットは五度間隔。製図用紙に描かれ、キャンバスに糊付けされている。大きさは八七×一〇五cm。

この地図に記されているのは、白海からチュコト海に至る北極海沿

岸、日本海、オホーツク海、ベーリング海の各沿岸、アリューシャン列島、クリール諸島、オビ川以東のシベリア、河川、要塞⁽¹⁷⁾、都市、地方境界線である。特記すべきことは、地図上に、マツマイ島とニポン島の各東部の輪郭のみが日本人との接触記録と共に記されていることである。

一七七四年に帝室科学アカデミーにおいて編纂された「ロシア航海者たちにより諸遠征時に発見され描かれたアメリカ北部地図。近辺付き」が刊行された⁽¹⁸⁾。地図の左下の隅にニフォン (ニッポン) 島が描かれる。その北方向にクリール諸島、それらからさらに遠く離れてサハリン島。縮尺は一インチが七二・五露里 (1:3045000) 【一露里は一・〇六七km】、中心・極射投影。経度・緯度グリットは五度間隔で区切られている。地図用紙を使用し、大きさは四四・三×六二・二cm。表題部には華麗な縁取り装飾がなされている。地図は手書きではなく、石版刷りである。

その数年後の一七七九年にメルカトル図法の地図が刊行された。この地図には、ロシアのアジア部分、北アメリカの西海岸、日本の二つの島エゾとニポンが描かれ、後者には「ナンガサキ。当地からオランダ人「原本は「ガランツィ」と表記」は海路・陸路、都市イエドに往来する」も表示されている⁽¹⁹⁾。縮尺は一インチが九〇マイル (1:6577200)、グリットは経度が五度、緯度は三度で区切られている。(図一)

一八世紀末に「ロシアアトラス。四三枚の地図から構成され、帝国を四一の県に分けたもの」が刊行された。マトマイ (マツマイ) 島の一部とジェゾ (エゾ) 島は以下の二つの地図に表示されている。

「アラスカ半島からヌトカ湾までのアメリカ西海岸を表記した地図。一七八四年、一七八六年、一七八七年、露英の航海者により発見され確認されたもの」、「イルクーツク県東部地図。二つの郡とチュコト地方を含む。アメリカ沿岸の島々とアメリカ西海岸付き」⁽²⁰⁾。

マトマイ島とサハリン島の間にはエゾあるいはジェゾ島が置かれている

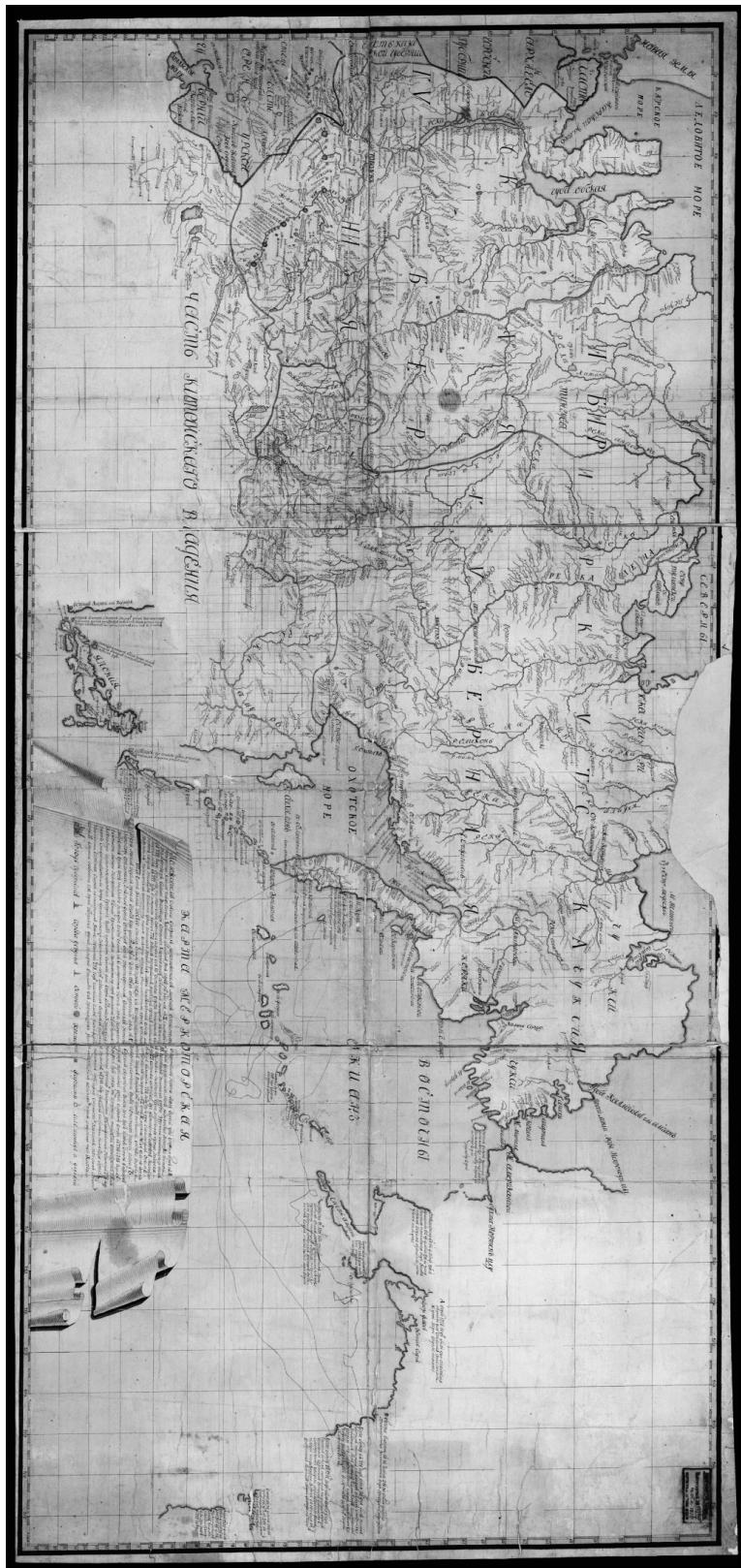


図1 マルカトール図法地図。様々な航海者たちの測量により構成されたもの 1799年 (ПЛАВМФ. Ф. 1331. Оп. 4. Д. 106)

が、エゾというのはマトマイ島の日本の名称であることは、まず間違いないと言っている。このように、これらの地図に描かれている日本の北部は信頼に足るものではない。

一七九二―一七九三年に陸軍中尉アダム・ラクスマンが外交目的で日本への航海を行った。とりわけ彼は、D・コダユを船頭とする「シンシヨーマル」【神昌丸】に乗っていた三人の日本人を故国に送還した。

この三人はカムチャツカの海岸に「アリュウシヤン列島のアムチャトカ島に総勢一六人が」投げ出され、その後【幸太夫が】ペテルブルグを訪れ、エカチェリーナ二世に拝謁した。日本側の不信にも関わらず、ラクスマンは、それまではオランダ人のみが享受していた特権、すなわち、長崎港訪問権を取り付けた。

当館のフォンドに所蔵されているものとして、「メルカトール図法地図。かつてオホーツクにいた海軍中佐ルティエフ氏「アルファベツトGを「氏」と読んだ」⁽²²⁾が作成し、掌帆兵曹サボージュニコフから私【ラクスマン】が受領したものの写し。下地は黄色顔料、クリール諸島の第一島から第一七島までは様々な地図を元に構成し緑色顔料で、第一八島から日本人がエゾと名付けている第二二島までは赤色顔料で表示、日本本土の海岸は極射投影で方位に従って描かれている。一七九二年から一七九三年にかけての日本遠征の際の往路は黒の点線で、復路は黄色の点線で表示されている」⁽²⁴⁾がある。(図2)

この地図には、オホーツク海、オホーツク海から北海道に至るまでの一七九二年から一七九三年のA・ラクスマンの日本遠征往路復路、クリール諸島と日本列島が表示されている。縮尺は一インチが四四マイル(1:321520)。地図グリッドは経線が三度、緯線が七度。緑がかつた薄紙に四色の顔料を用いて描かれている。サイズは六〇・四×四五・五cm。

この遠征の短くかつ簡単な記述、すなわち「陸軍中尉アダム・ラクスマン

指揮下の最初の遣日ロシア使節」は一八〇五年に公にされたが、ロシア帝国上層部からは注目されないままであった。

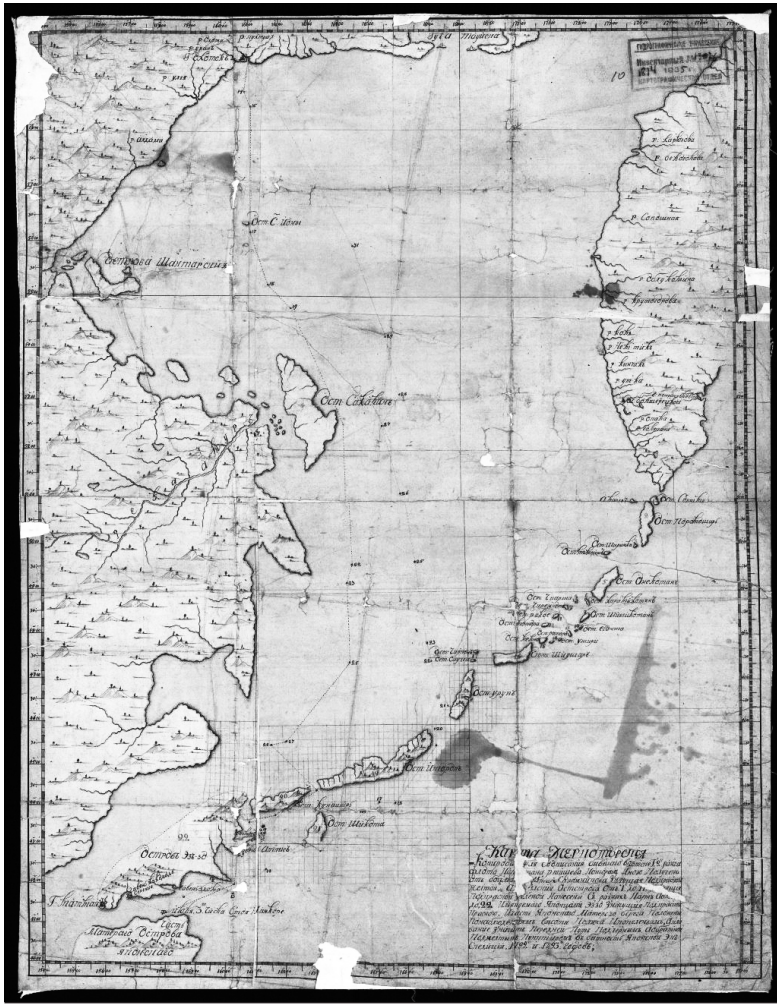
この時期日本へはすでに、ロシアの第一回世界周航遠征(一八〇三―一八〇六)帆船ナジェジダ号(司令官海軍少佐I・F・クルーゼンシュテルン)⁽²⁵⁾が来航していた。艦上にはヨーロッパの学者たち、侍従N・P・レザノフ⁽²⁶⁾を長とするロシア外交使節団がいた。使節団は日本で成功を収めなかったが、ナジェジダ号の乗組員が日本列島を海上から測量することには何ら支障はなく、その成果は後にI・F・クルーゼンシュテルンにより、ロシア語、フランス語、ドイツ語による数種の地図を編纂する際に利用された。しかしながら、その実現はそれから後の一八一二年から一八二七年にかけてであった。

一八〇七年ロシアでもう一点アトラスが刊行された。「ロシア帝国アトラス。最新県・州区画制に則つたもの。県中等学校で用いるため学務管轄中央総局の下で作成」⁽²⁷⁾である。このアトラスには一四個の地図が収められていたが、その中の最後の地図「イルクーツク県地図。アメリカ海岸・近接の島々付き」に、マトマイ島とニフォン島(日本島、現本州)が描かれている。それとほぼ同じ地図情報を「ロシア帝国総地図・アジア部分」⁽²⁹⁾に見ることができる。

一八〇九年一月イルクーツクで日本のオリジナルを元に地図が複製された。その名は「日本北部、マトマイ島、カラトサキ島、サハリン島の一部、日本島北端およびナムス県【南部藩か】に至るまでが描かれた大縮尺地図。ロシア、イルクーツク県、クリール諸島の境界線付き」。

マトマイ島にはマトマイの町が記載され、山岳地帯が図示され、地理名称が記入されている。⁽³⁰⁾この地図には、謎の島カラトサキが記載され、クリール諸島のおよその位置が示されていることから、元となった日本の地図は一七世紀に作られたものと結論することが出来る。

図2 メルカトール図法地図。A・ラクスマンの日本遠征時（一七九二—一七九三）中佐ルティーシチェフの測量地図からの写し（PIABMΦ. Φ. 1331. Oh. 4. 丹. 123）海軍

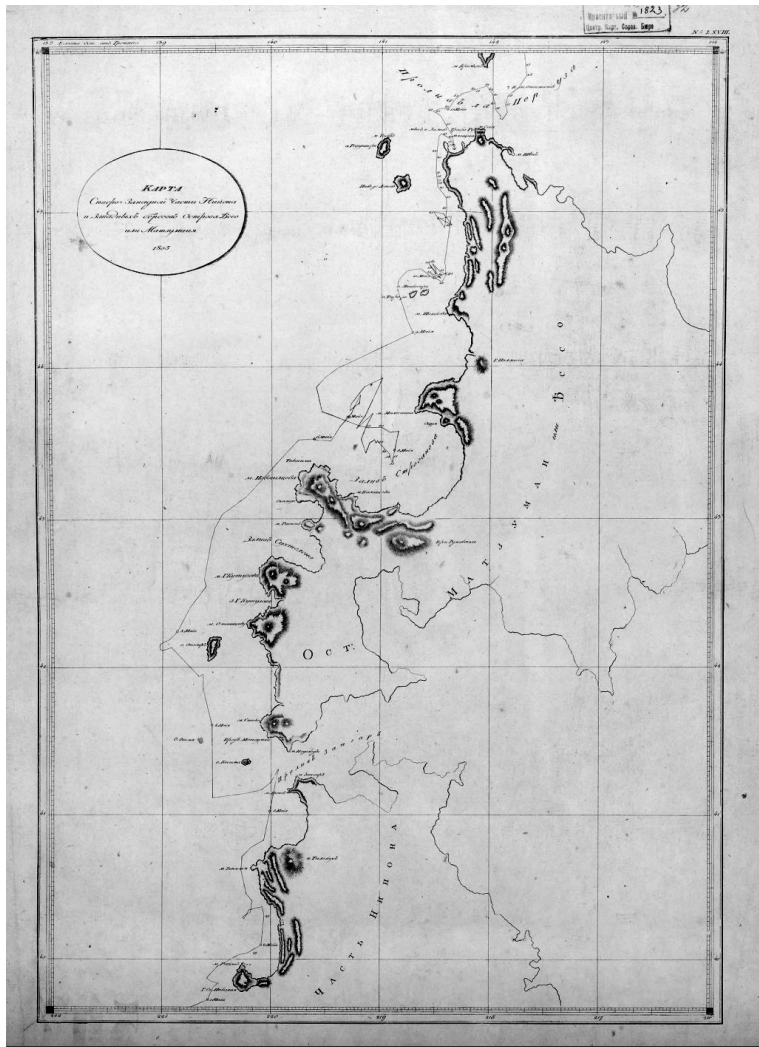


一八一一年に海軍省製図局で地図が作成された。「最新メルカトール図法地図。北緯二九度から四八度まで、経度はサンクトペテルブルグを起点とし、東経九六度から一二四度まで、朝鮮海とその沿岸、日本国全体、およびそれに接する東太平洋が描かれたもの」である。凡例には「日本国は日本の地図から情報を得「原本は「命名し」とある」、海岸と島の位置は最近の航海者たちの測量に従い訂正した」とある³¹⁾。

興味深いことは、奇しくもナポレオンのロシア侵攻時の一八一二年、世界周航の成果に則りクルーゼンシュテルンにより編纂された最初のアトラスが世に出たことである。そのドイツ語版「クルーゼンシュテルン大佐の世界周航アトラス」第四刷サンクトペテルブルグ一八一二 (Atlas zur reisen die welt des captain von Krusenstern vierthesht, St. Petersburg, 1812) の最初の一葉(五一)に、帆船ナジェジダ号の一八〇四年から一八〇五年の航海すなわちロシアの第一回世界周航時に測定された日本沿岸の一部が描かれている。その同ジアルバムには、興味深い白黒の日本人の風俗絵、顔また顔の一連のイラスト、さらに、岬や火山のスケッチが収められている。

一八一三年サンクトペテルブルグの海軍出版局から「クルーゼンシュテルン大佐の世界周航アトラス」のロシア語版が刊行された³²⁾。その中に日本列島を対象にした数枚の地図がある。例えば、第二六葉

図3 日本北西部と蝦夷島あるいは松前島の西沿岸地図（一八〇五年）クルーゼンシユテルンのアトラスより（PLABMΦ.Φ.1331. On. 4. J. 708. J. 30）



（頁26）「ニボン島日本海地図。ヴァン・ダイーメン海峡【大隅海峡】、サンガル海峡【津軽海峡】、朝鮮海峡付き、一八〇七年」（No. XLIII）。その地図には、海岸線および地名の他に陸地の山脈、および一八世紀から一九世紀初めにかけてのヨーロッパの航海者の航路が記されている。⁽³⁴⁾

このアトラスの第二八葉裏から第二九葉（頁28 06-29）に、台湾からカムチャツカ半島までの「太平洋の北西部地図。一八〇六年」が載せられている。そこには日本列島とナジエジダ号の航路も描かれている。⁽³⁵⁾

「日本北西部とエッソ島あるいはマツマイ島の西沿岸地図。一八〇五年」（No. LXVIII）がアトラスの第三〇葉（頁30）にある。この地図の中の日本の地には、山脈部分が描かれ、島々の西海岸沿いにナジエジダ号の航路が示されている。⁽³⁶⁾（図3）

「クルーゼンシユテルン指揮下の軍艦ナジエジダ号において一八〇四年、一八〇五年になされた発見と測量の地図」（No. LXXXIX）が第三六葉裏から第三七葉（頁36 06-37）にある。この地図は、ニッポン島（ホンシユウ）の北部からカムチャツカの中央部分までを対象とし、エッソ島あるいはマトマイ島を含んでいる。またこの地図には、沿岸の山地部分とナジエジダ

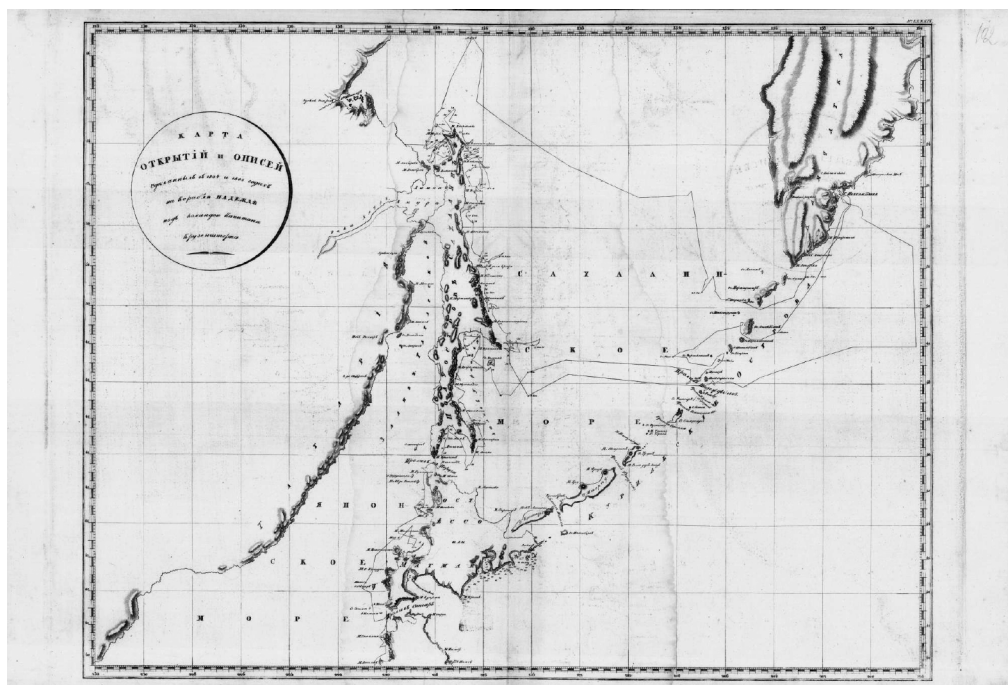


図4 クルーゼンシュテルン指揮下の軍艦ナジェジダ号において1804年、1805年になされた発見と測量地図。クルーゼンシュテルンのアトラスより (РГАВМФ. Ф. 1331. Оп. 4. Д. 708. Л. 36 об. -37)

号の航路も描かれている。(図4)

クルーゼンシュテルンのこのアトラスには、当時としてすらも歴史的価値を有する別の地図がいくつか収められている。そのひとつが「一七四三年、スペイン艦上でアンソン卿⁽³⁸⁾が作った改訂地図。アカプルコからマニラへのガレオン船の通常往復航海ルート付き。一八一〇年」(No. CXX)である。地図の左上隅に、エッソ以外の日本の島々がいくつか描かれている。⁽³⁹⁾

第四六葉 (F. 46) に描かれているのは「クリール諸島第二二島大縮尺地図。日本人によりエッゾと名付けられているもの、北東の岬Aから北方シムベツイ川Bまで、南方アトキンス湾までの図C。日本遠征隊が一七九三年に滞在した時に作成されたもの」(No. XXXVII)。すなわち、これはA・ラクスマンの遠征隊により作成された地図のことである。⁽⁴⁰⁾

このアトラスには地図の他に、日本沿岸の様子を墨で描いた絵も収められている。その他に、日本の日用品、魚などの絵が六つ挿入されている。中でも見事なのが「日本人の顔を描いたもの」で、クルーゼンシュテルン遠征隊の参加者であったV・チレジウスの絵によりP・I・マスコフスキーが作製したエッチングである。

別の「クルーゼンシュテルン大佐の世界周航にちなんだアトラス」⁽⁴²⁾では、「クリール諸島第二二島大縮尺地図。日本人によりエッゾと名付けられているもの」⁽⁴³⁾および上記の各種地図のみならず、ドイツ語による「長崎港湾図 (Plan des Haken Nangasky)」⁽⁴⁴⁾ (一八〇五)、ナジェジダ号の航路の入った「日本列島南岸およびヴァン・デーメン海峡【大隅海峡】地図」⁽⁴⁵⁾ (一八〇五) も見ることが出来る。

同アトラスにはV・チレジウスによる挿画、例えば「長崎の町の風景」⁽⁴⁶⁾、「長崎近くのメガサキ【梅ヶ崎】の風景」⁽⁴⁷⁾が入っている。(図5) 一八一四年ペテルブルグで、ドイツ語による地図「皇帝アレクサンド

(317) ロシア海軍軍人による日本地図作成 (1730年代—1820年代) (スマルノフ)

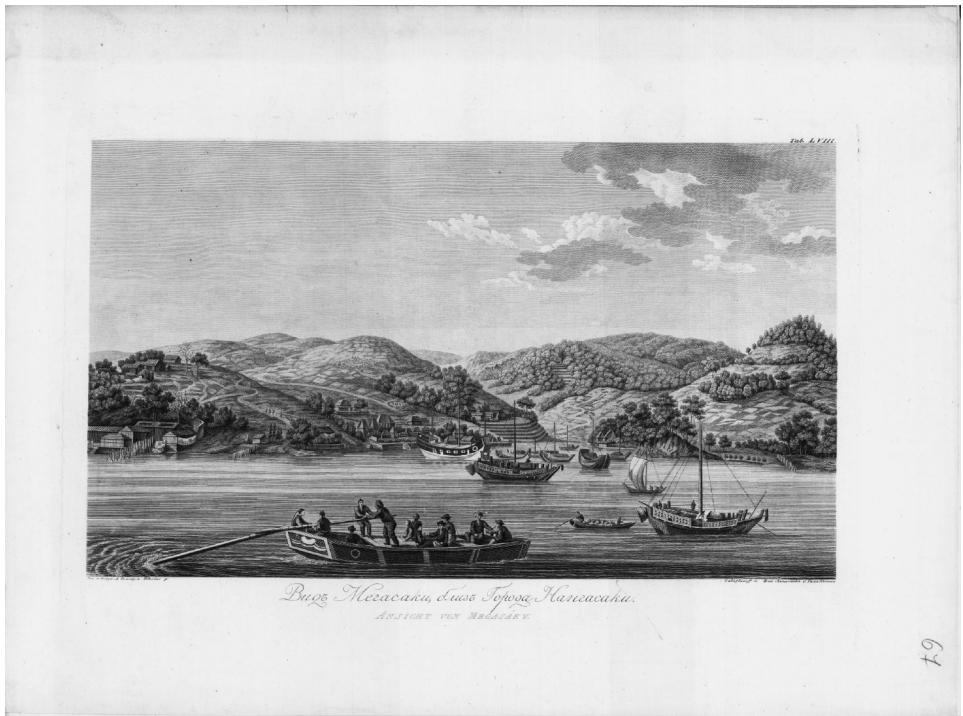


図5 長崎近くの梅ヶ崎の風景。チレジウス描。ガラクチオノフのエッチング。クルーゼンシュテルンのアトラスより (РГАВМФ. Ф. 1331. Оп. 4. Д. 709. Л. 67)

ル一世の命により行われたクルーゼンシュテルン大佐指揮下の帆船ナジエジダ号とネヴァ号での世界周航アトラス (Atlas zur reiseum die Welt unternommen auf Befehl Seiner Kaiserlichen Majestät Alexander des Ersten auf den Schiffen Nadescha und Neva unter dem Commando des Capitains von Krusenstern) が刊行された。太平洋北西部地図 (一八〇六年) を見ると、日本列島とそれを巡るナジエジダ号の航路が描かれている。第一七葉 (p. 17) は日本沿岸が断片的に入った地図で、ドイツ語によるクルーゼンシュテルンの「アトラス」 (Atlas zur reiseum die Welt des capitains von Krusenstern viertheil) にも掲載されていたものである (第一葉 (p. 1)。日本列島地図 (Charte der japanischen Inseln, St. Petersburg, 1811) は第二一葉 (p. 21) に、一八〇五年に作製されたキエウシユウ湾地図 (Chart der Bay Kiusiu) は第二二葉 (p. 22) に、イエッソ (マトマイ) 島とニッポン島北部図 (ナジエジダ号の航路付き) は第二三葉 (p. 23) に、それぞれ収められている。

A・ラクスマン指揮下の遠征において作成されたイエッソ島東部図は、アトラスの第三五葉 (p. 35) に収められている。

一八一七年に海軍省製図室で様々なアトラスからの情報を集めた「メルカトール図法カムチャツカ沿岸部分地図。サハリン島、エゾ島、クール諸島付」が編纂された。

同時期、イワン・クルーゼンシュテルンは自己の地図編纂作業を続けていた。一八二四年、皇帝の命によりアトラスが刊行された。「南海アトラス。国家海軍省製図局員、サンクトペテルブルグ、パリ、ストックホルム、ゲッティングゲン、エジンバラ各科学アカデミー会員、海軍少将・司令官クルーゼンシュテルンにより編纂」⁽³⁰⁾である。このアトラスには、「ナジエジダ号士官諸氏に対する」献辞付きの「マツマイ島あるいはエツソ島の地図」が収められている。地図には、ナジエジダ号の航路、ニ

ボン島の北部、サハリン半島の南部が記載されている。⁽⁵¹⁾

同じ一八二四年に、クルーゼンシュテルンの「南太平洋アトラス」がフランス語で刊行された。その名は「南太平洋アトラス、編纂者はロシア海軍司令官、サンクトペテルブルグ海軍省局員および科学アカデミー会員、ストックホルム、ゲッチンゲン、エジンバラ、リボルノ各科学アカデミー会員、パリ王立科学アカデミー準会員クルーゼンシュテルン氏、皇帝陛下の命により刊行、サンクトペテルブルグ (Atlas de l'Océan Pacifique dress par M. De Krusenstern, commandore de la marine Imperial de Russie, Member de l'Amirauté des Academies de S^t. Petersburg, de Stockholm, Gettingue, Edimbourg et de Livourne, Correspondent del' Akademie Royale des Sciences a Paris. Publie par ordre de sa MAJESTÉ IMPERIALE, S^t.Petersbourg)」全四七葉から成るアトラスである。⁽⁵²⁾

その中に日本の地図も複数枚含まれている。例えば、第三三葉裏と第三四葉 (p. 33, 06-34) には日本列島の地図が入っている。「ワイマール大公献上日本帝国地図第二二二号 (Carte de l'Empire du Japon repeuchusement Royale Grand Du de Weymar. No. 22)」である。右下隅にナガサキ港図がはめ込まれている極めて詳細な地図である (九州湾内長崎港図)。⁽⁵³⁾

次の第三五葉 (p. 35) はエッソ島の地図第二三三号 (一八二七) で、ナジェジダ号の士官一同への献辞が入っている (Carte de l'île Lesso dédiée a M.M. Les officiers de la Nadjéda, 1827, No. 23)。⁽⁵⁴⁾ この二の地図にはナジェジダ号の航路が記されている。

一八二七年に「南太平洋アトラス」のフランス語版が再発行された。⁽⁵⁵⁾ 前記の諸地図が第三六葉から第三八葉にかけて (p. 36-38) 入っている。

一八二六年に「陛下の命」によりアトラスが刊行された。「南海アトラス第二部、国家海軍省局員、サンクトペテルブルグ、パリ、ストック

ホルム、ゲッチンゲン、エジンバラ各アカデミー会員の海軍少将クルーゼンシュテルン編纂⁽⁵⁶⁾」で、皇帝ニコライ一世ならびに故皇帝アレクサンダー一世への献辞が入っている。このアトラスには「南海総地図。二葉。赤道から北緯七二度三分、東経一一二度三分から一九二度三分まで。第一六号」がある。地図の左中部に日本列島が載っている。⁽⁵⁸⁾

このアトラスの第四四葉裏と第四五葉に (p. 44, 05) 載っているフランス語による日本地図は、「南太平洋アトラス」(フランス語) 所収の地図に酷似している。

同じ一八二六年、「東太平洋北部アトラス。最新の測量および諸地図を元に海軍製図局編纂」が海軍中将・水路総監 G・A・サルイチェフ指揮下に出版された。⁽⁵⁹⁾

このアトラスの中に収められている「メルカトル図法地図。東太平洋・北極海部分」(一葉)⁽⁶⁰⁾ に日本が描かれている。しかしながら、より大きな日本列島図が九葉の地図「メルカトル図法日本海・黄海地図。北緯一八度から四七度まで、経度はペテルブルグを起点とし東経七五度から一二五度までの、中国・日本沿岸に接する東大洋の一部を含む」に収められている。⁽⁶¹⁾ 日本沿岸の地図には土地の起伏も描かれる。地図上の距離は、露里 (西樺) とドイツマイル (東樺) で表示されている。

最後に、結論として以下のことを指摘しておかなければならない。百年足らず (一七三〇年代から一八二〇年代まで) の間にロシアの未踏の地発見者および航海者たちは日本沿岸への航海および遠征を何度も成し遂げ、その結果として、日本列島沿岸を描いた一連の海図が作成され、沿岸、住民、動物、魚、日用品の様子を収めた多数の絵が描かれた。なお、海図および海洋アトラスの編纂に際してはヨーロッパ諸国で創られた地理学作品が利用された。

● スミルノフ論文使用挿図の出典

Список иллюстраций к статье В.Г. Смирнова

1. Карта меркаторская. Составлена по описаниям разных мореплавателей. 1779 г. (РГАВМФ. Ф. 1331. Оп. 4. Д. 106). 【メルカートル図法地図。様々な航海者の測量により構成されたもの。一七九九年】(РГАВМФ. Ф. 1331. Оп. 4. Д. 106) 注9本文部分参照】
2. Карта меркаторская, с указанием маршрута экспедиции А. Лаксмана в Японию в 1792-1793 гг. Копирована с описания бывшего в Охотске капитана 2-го ранга Риппева (РГАВМФ. Ф. 1331. Оп. 4. Д. 123). 【メルカートル図法地図。А・ラクスマンの日本遠征時(一七九二-一七九三)の往復航路が表示。オホーツク滞在歴のある海軍中佐ルティエーシチェフの測量地図から写し】(РГАВМФ. Ф. 1331. Оп. 4. Д. 123) 注24本文部分参照】
3. Карта Северо-Западной части Японии и западных берегов острова Ессо или Магумаи. 1805 [год]. Из «Атласа» И.Ф. Крузенштерна. СПб., 1813 (РГАВМФ. Ф. 1331. Оп. 4. Д. 708. Д. 30). 【日本北西部とエッソ島あるいはマツマイ島の西沿岸地図(一八〇五年)】I・F・クルーゼンシュテルンの「アトラスより」サンクトペテルブルグ一八二三年 注36本文部分参照】
4. Карта открытий и описей, сделанных в 1804 и 1805 годах на корабле «Надежда» под командою Крузенштерна. Из «Атласа» И.Ф. Крузенштерна. СПб., 1813 (РГАВМФ. Ф. 1331. Оп. 4. Д. 708. Д. 36 06. - 37). 【「クルーゼンシュテルン指揮下の軍艦ナジェジダ号において一八〇四年、一八〇五年になされた発見と測量地図。I・F・クルーゼンシュテルンの「アトラスより」】(РГАВМФ. Ф. 1331. Оп. 4. Д. 708. Д. 36 06. - 37) 注37本文部分参照】
5. Вид Мегасаки близ города Нангасаки. Рисовал В. Тилезиус. [Гравюра академика С.Ф. Галактионова. Из «Атласа» И.Ф. Крузенштерна. СПб., 1813 (РГАВМФ. Ф. 1331. Оп. 4. Д. 709. Д. 67). 【長崎近くのメガサキ【梅ヶ崎】の風景。V・チレジウス描。アカデミー会員S・F・ガラクチオノフのエッチング。I・F・クルーゼンシュテルンの「アトラスより」】(РГАВМФ. Ф. 1331. Оп. 4. Д. 709. Д. 67). 注47本文部分参照】

注

- (1) Описание старинных атласов, карт и планов XVI, XVII, XVIII и первой половины XIX века, хранящихся в архиве Центрального картографического производства ВМФ. СПб.: Картофабрика ВМФ, 1958. 270 с.: 25 л. карт.
- (2) То же. Репринтное издание 1958 г. СПб.: Альфарет, 2013. 288 с.: 25 л. карт.
- (3) РГАВМФ. Ф. 1331. Оп. 4. Д. 775. Д. 55 06-56.
- (4) Там же. Д. 58.
- (5) Там же. Д. 84.
- (6) РГАВМФ. Ф. 1331. Оп. 4. Д. 780. Д. 34 06-35.
- (7) РГАВМФ. Ф. 1331. Оп. 4. Д. 763. Д. 4 06. - 5.
- (8) РГАВМФ. Ф. 1331. Оп. 4. Д. 789. Д. 16 06-17.
- (9) РГАВМФ. Ф. 1331. Оп. 4. Д. 796. Т. 1. Д. 72-73.
- (10) ベーリング・ヴィットゥス・ヨナッセン (Vitus Jonassen Bering, 1681-1741) ロシアの航海者。デンマーク出身。一七二五年-一七三〇年、第一次カムチャッカ遠征、一七三三年-一七四一年、第二次カムチャッカ遠征。チュコト半島とアラスカの間海峡(後にベーリング海峡と名付けられた)を通過し、北アメリカに到達。アリューシャン列島の島々々々を発見。
- (11) Шупанберг, Марчен・Петровиич (一六九六-一七六一) ロシアの航海者。デンマーク出身。第一次カムチャッカ遠征(一七二五-一七三〇)・第二次カムチャッカ遠征(一七三三-一七四三)に参加。一七三八-一七三九年クリール諸島、日本沿岸へ航海。一七四五-一七四五年、シベリアから許可なく帰着し、その廉で裁判に付され死刑を宣告されるも、一七四七年、刑の執行に代え三ヶ月間陸軍中尉格【ロシア海軍には「中尉」相当の身分がない】で海軍任務に就く降格処分に減刑される。一七四九年帆走戦列艦ヴァラハイル号を指揮。同艦は北ドヴィナ河口で浸水し、三週間後に沈没。軍艦および乗組員二八名喪失罪で終身懲役刑の恐れがあったものの、「皇帝の」勅令により一七五二年二月一

五日付で無罪。海軍大佐（一七五三年）。クロンシュタットにて没。

- (12) ウイリアム・ウォールトン（?—一七四三）ロシアの航海者（一七二三年から）。イギリス出身。「大北方遠征」（一七三三年—一七四三年）に参加、海軍大尉（一七三〇年）。一七三三年M・P・シュパンベルからの要請で遠征の南支隊に加わる。帆走漕艇艦ナジエジダ号を指揮し、一七三八年と一七三九年に航海。第一次航海時に全艦に先駆けエツソ島まで南下し、複数の島を発見した。第二次航海時ではシュパンベルグ艦に遅れ、数日後に日本に到達。日本島の東岸に向かい、そこで二週間近く留まった。（実際にはシュパンベルグは日本には行っていないという）反シユパンベルグ謀略に参画し、その結果一七三九年の諸発見の検証命令が出された。一七四一年、海軍少佐時にオホーツク海を調査。一七四三年モスクワに戻り、同地で没。

- (13) Tabul' (tabul') *ʔ*dilinat (jurininar) も詳細不明。
(14) ПЛАНМФ. Ф. 1331. Он. 4. Д. 64.
(15) Там же. Д. 65.
(16) ПЛАНМФ. Ф. 1331. Он. 4. Д. 82.
(17) 「要塞 (Орпор)」とは、城塞建造物（拠点）。通常、高さ四一六mの先端を尖らせた丸太円柱で囲まれた恒常的あるいは一時的な強化居住地点のこと。

- (18) ПЛАНМФ. Ф. 1331. Он. 4. Д. 86.
(19) ПЛАНМФ. Ф. 1331. Он. 4. Д. 106.
(20) ПЛАНМФ. Ф. 1331. Он. 4. Д. 741. Д. 6-6 о6. 81.
(21) ラクスマン、アダム（一七四六—一八〇六）アカデミー会員エリック・ラクスマンの息子、陸軍中尉。【オホーツク海に面する】ギジギンスクで郡警察署長の職にあった。当時外国人に対し閉ざされていた日本訪問を成し遂げた最初のロシア帝国臣下のうちの一人。
(22) ルテイーシチェフ、ワシリー・アレクセエヴィチ（一七〇五—一七八〇）海軍士官。「大北方遠征」に参加、オホーツク海を探索。海軍中佐。一七四一—一七四二年にクリール諸島方面への航海に参加し、オホーツク海沿岸の一部の測量を行い、シヤンタル諸島およびサハリン島東

部海岸の地図を作成した。遠征終了後はオホーツクに勤務、オホーツク港湾司令官（一七六〇—一七六四）、一七六四年からオホーツク港湾海軍司令官補。一七七六年サンクトペテルブルグ帰還、退職願を出す。一七八〇年没。

- (23) 史料では「Boatsman mar」と離して綴られているが、正しくは「Boatman mar」と続けて綴る。

掌帆兵曹は、ロシアおよび各国の海軍にかつてあった階級名、実戦部隊の下士官。【より具体的にはドイツ語 *Bootsmansmaat* からの音写語で、英語では *Boatswain's mate* すなわちボースン（甲板長）指揮下の船員】

- (24) ПЛАНМФ. Ф. 1331. Он. 4. Д. 123.
(25) クルーゼンシュテルン、イワン・フョードロヴィチ (Adam Johann von Krusenstern, 1770-1846) ロシアの航海者。ドイツ出身。海軍大將（一八四二）。ロシアの第一回世界周航（一八〇三—一八〇六）の指揮官。ペテルブルグ海軍士官学校査督官（一八一—）、同校長（一八二七—一八四二）。ロシア地理学協会（一八四五）創設者の一人、科学アカデミー名誉会員。O・コツェプー（一八一五—一八一八）、M・ワシリエフとG・シシマレフ組（一八二六—一八二九）、F・ペリンズガウゼンとM・ラザレフ組（一八一九—一八二二）、V・スタニコヴィチとF・リトケ組（一八二六—一八二九）の世界周航準備を主導した。一八七三年サンクトペテルブルグに顕彰碑が建立。
(26) レザノフ、ニコライ・ペ트로ヴィチ（一七六四—一八〇七）侍従（一八〇五）、外交官、旅行家、起業家。G・I・シュリホフと共に露米会社を創設（一七九八）。ロシアの第一回世界周航（一八〇三—一八〇六）の指揮者の一人、最初の公式遣日使節【ママ】、最初の露和辞書のひとつの編纂者。科学アカデミー名誉会員（一八〇三）。
(27) ПЛАНМФ. Ф. 1331. Он. 4. Д. 742.
(28) Там же. Д. 28 о6-29.
(29) Там же. Д. 4 о6-5.
(30) ПЛАНМФ. Ф. 1331. Он. 4. Д. 136.

- (31) PTABMΦ. Φ. 1331. Or. 4. D. 138.
 (32) PTABMΦ. Φ. 1331. Or. 4. D. 911. J1. 1.
 (33) PTABMΦ. Φ. 1331. Or. 4. D. 708.
 (34) Tam xce. J1. 26.
 (35) Tam xce. J1. 28. 06. - 29.
 (36) Tam xce. J1. 30.
 (37) Tam xce. J1. 36. 06. - 37.
 (38) ショージ・アンソン (George Anson, 1697-1762) アンソン初代男爵、イギリスの海軍大将。世界周航（一七四〇—一七四四）で有名。一七五一年、旗艦センチュリオン号の宣教師リチャード・ウォルターにより編集された航海記『一七四〇年、四一年、四二年、四三年、四四年南海探索に派遣された大英帝国国王軍艦遠征隊司令官の世界周航記』のロシア語訳が出版された。
- (39) PTABMΦ. Φ. 1331. Or. 4. D. 708. J1. 43.
 (40) Tam xce. J1. 46.
 (41) Tam xce. J1. 54. ナレジウス、ウールヘルム・ゴットリーブ・フォン・チレンナウ (Wilhelm Gottlieb Tilesius von Tilenau, 1769-1857) ドイツの植物学者。ロシアの第一回世界周航に医師および自然科学者として参加。
- (42) PTABMΦ. Φ. 1331. Or. 4. D. 709.
 (43) Tam xce. J1. 41.
 (44) Tam xce. J1. 48.
 (45) Tam xce. J1. 49.
 (46) Tam xce. J1. 61.
 (47) Tam xce. J1. 67.
 (48) PTABMΦ. Φ. 1331. Or. 4. D. 912. J1. 2.
 (49) PTABMΦ. Φ. 1331. Or. 4. D. 143.
 (50) PTABMΦ. Φ. 1331. Or. 4. D. 711.
 (51) Tam xce. J1. 33. タルレーゼンシムテルンは自らの地図でサハリンを誤って半島と記した。

- (52) PTABMΦ. Φ. 1331. Or. 4. D. 710. 扉に F・P・リトケの署名と「私から尊敬する編著者の贈り物」という彼の書き込みがある。第二葉には皇帝アレクサンダー一世への献辞が印刷で入る。
 (53) PTABMΦ. Φ. 1331. Or. 4. D. 710. J1. 33. 06.-34. 扉の二頁目にフランス語による一文と一八二七という刊年が入っている【マム】。
 (54) Tam xce. J1. 35.
 (55) PTABMΦ. Φ. 1331. Or. 4. D. 714.
 (56) PTABMΦ. Φ. 1331. Or. 4. D. 712. 扉の二頁目にフランス語による一文と一八二七という刊年が入っている。
 (57) Tam xce. J1. 3-5.
 (58) Tam xce. J1. 35. 06.-36.
 (59) PTABMΦ. Φ. 9. Or. 4. D. 716.
 サレイチェフ、ガウリイル・アンドレエヴィチ（一七六三—一八三二）水路学者。I・I・ピリングス（一七八五—一七九三）指揮下の地理・天文探検隊に参加。科学アカデミー名誉会員（一八〇九）。水路学総監（一八二七）。
- (60) PTABMΦ. Φ. 9. Or. 4. D. 716. J1. 6. 06.-7.
 (61) Tam xce. J1. 22-23.

（翻訳：有泉和子）
 【】内は訳注。